



海外日本語教育レポート 第4回

フランス日本語教師会 会長・国立理工科大学 専任講師 石井陽子



このコーナーでは、海外の日本語教育について広く情報を交換したり、お互いの交流をはかるために、各地域の新しい試みやコース運営などについて、関係者の方々に具体的に紹介していただきます。

フランス日本語教師会の活動と課題

フランス日本語教師会が設立されたのは1997年である。その当時は多くの教師たちにとって孤立、情報不足という状態がまだ続いていた。このような閉鎖状態を改善するために、日本語を専攻としていない学生に教えている教師を中心に有志が集まり、ネットワークの確立を目指して、会が結成された。

本会は設立当初より一貫して日本語教育に関心のある者すべてに門戸を開いている。故に、会員構成は上は日本語学の大学教授から下はこれから教師になりたい卵までと、あらゆるタイプ、あらゆる分野で教鞭をとっている教師たちを結集した会である。この点、大学で教えている教師の会である英国日本語教育学会と異なる。また中等教育、高等教育、成人教育と部門別の教師会があるドイツのあり方とも違っている。

以来、我が会の活動目的は、情報交換や相互協力を可能にするためのネットワーク確立にある。そのために各種活動を行っているが、その中で特にネットワーク作りに効果をあげているものはシンポジウム開催とニュースレター発行である。

我が会のニュースレターの特徴は原則として会員からの投稿(ほとんどが依頼投稿であるが)で構成されている。シンポジウムあるいは勉強会のレジュメや所属機関の紹介の他、「日本語教師、私の場合」という自分と日本語教育との係わり合いを語ってもらおうコラム、各自の教授法を披露してもらおう「アイデア広場」、など毎回違った会員に書いてもらうことを原則にしている。現在ニュースレターは20号に達し、すでに1/3以上の会員が執筆していることになる。

年1回開催されるシンポジウムは毎回開催地を変えており、その地の会員が大会組織委員となる。すでにフランスの5都市(グルノーブル、トゥール、リヨン、パリ、アヌシー)で行われ

たわけであるが、その都度、開催地近辺の非会員教師たちを巻き込んでいく。ちなみに2003年のテーマは「次元の日本語教育：中等教育と高等教育の接点を求めて」で開催地はアルプスの都市、アヌシーであった。シンポジウムは日本語教師としての知識を深め、教授技能を高める場であると同時に、これを機会に意見・情報を交換し、同じ問題意識を確認し合い、また年1回の再会を楽しみ、友情を築く場ともなっている。このような活動が徐々に実を結び、現在ネットワークは確実に形成され、協力体制が非常に良く機能するようになった。会員間には様々な情報がかんり行き渡るようになり、雇用情報などもこのような中で自然に広まり、効果をあげている。



ニュースレター

しかし、問題がないわけではない。前にも述べたとおり、非常に幅の広い会員構成となっているので、会に対

する期待も様々であろう。どのレベルに焦点を当てるか、どんなテーマを取り上げたいのか難しいところである。会員みんなが恩恵を被り、共に前進していくというのは可能なのであろうか。どのような形が考えられるであろうか。この事実は特に定例勉強会を運営する上で非常に問題になるところである。この点について少し述べてみたい。

まず勉強会の運営に関する問題として、講師の人材不足がある。会員が講師となってあるテーマについて日頃の経験または考察を発表し、それをもとに討論するという形を取っているが、講師として勉強会を担当できる会員の数にも限りがある。また同じ人が担当するのでは負担が多すぎるし、新鮮さもかけてくる。謝礼を払って外部から講師を招く方法も取っているが、適当な人材（講師）を見つけるのはかなり困難であり、資金的問題もある。

テーマに関しては、幅広い層にアピールしえるテーマはやはり日々の授業に直接活用できるような教授法に関するもの、教材作成に関するものであろうが、担当できる会員あるいは講師がなかなかいない。言語学的アプローチのテーマとなると参加者が狭まり、一定の会員だけになる。このような中で、最近、新しい試みとして読書会を始めた。これは予め講読テキストを選び、勉強会の前に必ずそれを読んで会に出席するというものだ。その狙いは会員の参加をより能動的なものにすることであったが、この方法でも参加者が限定されてしまっている。

その他、開催の曜日、時間帯など様々な問題を抱え、現在のところこの勉強会はもっぱら存在することに意義があるようだ。試行錯誤を重ねながら模索中といえよう。パリ日本文化会館に国際交流基金の派遣専門家がいて指導してくれたらと思うわずにはいられない。



〈写真1〉2003年3月22日に行った第15回定例勉強会
(パリ日本文化会館にて)

我が会は現在110名の会員がいる。その内フランス人会員は8名である。フランスにおける日本語教師は、日



〈写真2〉2002年度第4回フランス日本語教育シンポジウム(パリ日本文化会館にて)パリ第7大学、堺教授の基調講演(2002年3月10日)

本人教師が大多数を占めてはいるので、我が会に日本人会員が多いのは当然である。大学の日本語日本学専攻科でも実践日本語教育はネイティブが担当しているし、グランゼコール(Grandes Ecoles 単科大学)などの機関での外国語教育の中の日本語教育ではむしろネイティブの教師の方が歓迎される傾向にある。しかし、中等教育部門についていうと、正規のポストにつくには国の教育資格免状(agrégation, CAPES)が必要であり、その免状を取得するにはフランス国籍を必要とするので、中等教育ではフランス人教師が比較的多い。この教師たちは我が会の活動に参加しえる潜在性を持っている。が、現在のところ、コンタクトはあまりない。その原因の一つに日本語教育に対する考え方の相違が考えられる。彼らは大学で受けた伝統的な日本語教育を受けついでおり、現在世界の主流を占めているコミュニケーション型な日本語教授法にはむしろ消極的である。今後の課題はこれらフランス人教師とコンタクトを密にし相互理解を図ることであろう。彼らとも協力体制を敷き、ともに活動できたらと願う。

我が会も6年を経た現在、存在もかなり知られ、会が果たしている役割も認められるようになってきた。地道な努力が実を結んでいるのだろう。今後も焦らず、たゆまず、活動を続けていこうと思っている。



〈写真3〉同、2002年度第4回フランス日本語教育シンポジウム、研究発表

フランス日本語教師会 概要

にほんごきょうし かい がいよう

<p>設立 <small>せつりつ</small></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・設立年：1997年5月（フランス法に則る非営利団体） <small>せつりつねん ねん がつ ほう のっと ひえいりだんたい</small> ・背景：1980年代日本語学習者の急激な増加に伴い、日本語教育としての専門教育を受けていない者も日本語教育に携わることになったが、そのような教師の孤立した状況を改善するため、国際交流基金主催の在外邦人日本語教師研修に参加した教師を中心に、教師間ネットワークの確立を目的に設立された。 <small>はいけい ねんだい にほんごがくしゅうしゃ きゅうげき ぞうか ともな にほんごきょういく せんもんきょういく う もの にほんごきょういく たすき せいかく くにこくこうりゅう きんしんしゆさい ざいがいがいほう じん にほんごきょうし けんしゅう さん か きょうし ちゅうしん きょうし かん かくりつ もくてき せつりつ</small>
<p>会員 <small>かいいん</small></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・会員数 110名（2003年3月15日現在） <small>かいいんすう めい ねん がつ にちげんざい</small> ・初中等教育教師数 17、高等教育教師数 57、学校外教育教師数 28、大 <small>しよちゅうとうきょういくきょうしすう とうとうきょういくきょうしすう がっこうがいきょういくきょうしすう だい</small> 学教授等研究者数 1、大学院生 4、その他 15。 <small>がくきょうじゆとうけんきゅうしやすう だいがくいんせい た</small> 注-1教師が1部門以上で教えている場合があり、総数は会員数を上回る <small>ちゅう きょうし ぶもん いじょう おし ばあい せうすう かいいんすう うわまわ</small>
<p>会費 <small>かいひ</small></p>	<p>個人会員：入会費 15.24ユーロ（100F）、年会費30.49ユーロ（200F） <small>こじんかいいん にゅうかいひ ねんかいひ</small></p> <p>法人会員：入会費 152.45ユーロ（1000F）、年会費304.90ユーロ（2000F） <small>ほうじんかいいん にゅうかいひ ねんかいひ</small></p> <p>賛助会員：年会費 76.22ユーロ（500F） <small>さんじょかいいん ねんかいひ</small></p>
<p>定期刊行物他 <small>ていきかんこうぶつほか</small> コミュニケーション・ツール</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ニュースレター「フランス日本語教師会便り」奇数月（年6号）発行、 <small>にほんごきょうし かいだよ きすうつき ねん ごう ほうこう</small> 発行部数150部、ページ数一平均10ページ（A4）、「お知らせ欄」で各 <small>ほうこう ぶすう ぶ すう へいぎん しらん かく</small> 種情報提供、記事は会員に寄稿依頼。現在20号に至る。 <small>しゆじょうほうていきょう きじ かいいん きこうらい げんざい ごう いた</small> ・メーリングリスト（参加者87名）により、会内の緊急を要する情報を伝 <small>さん かしゃ めい かいない きんきゅう よう じょうほう でん</small> 達する。また国内国外より事務局に送られた各種情報（特に学会、講演 <small>たつ こくないこくがい じむきょく おく かくしゆじょうほう とく がっかい こうえん</small> 会、研修会開催等）を流す。 <small>かい けんしゅうかいがいさいとう なが</small>
<p>現職日本語教師向諸活動 <small>げんしよく にほんごきょうしむけしよかつどう</small></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「日本語教育シンポジウム」（年1回4月）開催地はフランス国内各都市 <small>にほんごきょういく ねん かい がつ かいざいち こくないかくとし</small> を巡回。本年は第5回で開催地はアヌシー市。プログラムは招待講師の <small>じゆんかい ほんねん だい かい かいざいち し しゅうたいこうし</small> 講演・ワークショップ、参加者の研究発表、パネルディスカッション、 <small>こうえん さん かしゃ けんきゅうはつひょう</small> 懇親会。 <small>こんしんかい</small> ・「定例勉強会」（隔月年5回）。会場はパリ日本文化会館。本年3月で計 <small>ていれいべんきょうかい かくげつねん かい かいじょう にほんぶん か かいかん ほんねん がつ けい</small> 15回開催。テーマは日本語教育・日本語学、日本文化事情等。 <small>かいかいさい にほんごきょういく にほんごかく にほんぶん か じじょうどう</small> ・「フランス日本語教育」発行。2002年5月に第1号（第1、2、3回シ <small>にほんごきょういく ほうこう ねん がつ だい ごう だい かい</small> ンポジウムの報告・論文集）を発行。 <small>ほうこく ろんぶんしゅう ほうこう</small> ・「ヨーロッパ日本語教育シンポジウム」（「ヨーロッパ日本語教師会」主 <small>にほんごきょういく ほんごきょうし かい しゆ</small> 催）へ会員が参加した場合、参加費援助。 <small>さい かいいん さん か ばあい さん か ひえんじよ</small>
<p>教師養成 <small>きょうし じょうせい</small></p>	<p>ACTFL OPI ワークショップ開催。欧州第2回OPI養成講座を2003年6月 <small>かいさい おうしゅうだい かい ようせいこうざ ねん がつ</small> にパリ日本文化会館で行う。受講者は欧州、アメリカ在住の日本語教師。 <small>にほんぶん か かいかん おこな じゆこうしゃ おうしゅう ざいじゅう にほんごきょうし</small></p>
<p>その他 <small>た</small></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・エキスポラング（パリ言語博覧会）から要請があった場合、模擬授業や <small>げんごはくらんかい ようせい ばあい もぎじゆぎょう</small> 講演の開催などで参加。 <small>こうえん かいさい さん か</small>

※本紙45号の「海外日本語教育レポート」の中で、VJCCホーチミンに派遣されている平田好専門家のお名前のルビを「よしみ」ではなく「このむ」と、間違えて記載しました。この場を借りてお詫びいたします。